

久助君の話きゆうすけくん

新美にいみ 南吉なんきち

久助君は、四年から五年になるとき、品行方正ひんこうほうせいのほうびをもらってきた。学術優等がくじゆつゆうとう

はじめて久助君がほうびをもらったので、電気会社の集金人であるお父さんは、ひじょうにいきごんで、それから、久助君が学校から帰ったらすぐ、一時間勉強することに規則きそくをきめてしまった。

久助君はこの規則を喜ばなかった。一時間たって、家の外に出てみても、近所に友だちが遊んでいないことが多いので、そのたびに友だちをさがして歩かねば

ならなかったからである。

秋のからりと晴れた午後のこと、久助君は柱時計が三時半をしめすと、「ああできた。」と算術さんじゆつの教科書をぱたツとじ、机つくえの前を立ちあがった。

そとに出るとまばゆいように明るい。だが、やれやれ、今日きょうも仲間なかまたちの声は聞こえない。久助君はお宮の森の方へ耳をすました。

森は久助君のところから三町ははなれていたが、久助君はそこに友だちが遊んでいるかどうかを、耳で知ることができたのだった。だが、今日は、森はしんとしていてうまい返事をしない。つぎに久助君は、ほんたいの方の夜学校のあたりに向かって耳をすました。夜学校も三町ばかりへだたっている。だが、これもよい合図を送らない。

しかたがないので久助君は、彼らかれらの集まっていそうな場所をさがしてまわることにした。もうこんなことが、なんどあったかしれない。こんなことはほんとに

いやだ。

さいしよ久助君は、宝蔵倉の前にいつてみた、多分の期待を持って。そこでよくみんなはキャッチボールをするから。しかしきてみると、だれもない。そのはずだ、豆が庭いっぱいほしてある。これじゃ何もして遊べない。

そのつぎに久助君は、北のお寺へいった。ほんとうはあまり気がすまなかったのだ。というのは、そこは別の通学団の遊び場所だったから。しかしこんなよい天気の日にとりで遊ぶよりはましだったので、いったのである。がそこにも、丈の高いはげいとうが五六本、かつと秋日にはえて鐘撞堂の下に立っているばかりで、犬の子一ぴきいなかった。

まさか医者の家へなんか集まっていることもあるまいが、ともかくのぞいてみようと思って、黄色い葉のまじった豆畠のあいだを、徳一君の家の方へやっていった。その途中、ほし草のつみあげてあるそばで兵

太郎君にひょつくり出会ったのである。

兵太郎君はみんなからほら兵とあだなをつけられていたが、まったくそうだった。こんな鰻をつかんだといって両方の手の指で天秤棒ほどの太さをしてみせるので、ほんとうかと思つていつてみると、筆ぐらいのめそきんが、井戸ばたの黒いかめの底にしずんでいるといふのである。またみんなが軍艦や飛行機の話をしていると、おれが武豊でみたのは、といつて、ベラぼうなことをいい出すのだった。また兵太郎君は？音痴で、君が代もろくろく歌えなかったが、いっこうそんなことは気にせず、みんなが声をそろえて軍艦マ―チをやっていると、すぐ唱和するので、みんなは調子が変わつて、やめてしまふのであった。だが、わる気はないのでみんなにきらわれてはいない。ときどき鼻をすこし右にまげるようにして、きゅつと音をたててすいあげるのと、笑うとき床の上だろうが、道の上だろうが、ところきらわず下にころがる癖があつた。

体操のとき、久助君のすぐ前なので、久助君は彼の頭のうしろ側にいくつ、どんな形の、はげがあるかをよく知っている。

兵太郎君は、てぶらで変にうかぬ顔をしていた。

「みんなどこにいったか知らんかア。」

と久助君がきいた。

「知らんげや。」

と兵太郎君が答えた。そんなことなんかどうでもいいという顔をしている。丸太棒のはしを大工さんのみで、ちよつちよとほつてできたようなその顔を、久助君はまぢかにつくづくとみた。

「徳一がれにいやひんかア。」

と、久助君がまたきいた。

「いやひんだらア。」

と、兵太郎君が答えた。赤とんぼが兵太郎君のうしろを通って行って、ほし草にとまった。そのはねが陽の光をうけてきらりと光った。

「いつてみよかよオ。」

と、久助君がじれったそうにいった。

「ううん。」

と兵太郎君はなまへんじをした。

「なア、いこうかよオ。」

と、久助君はうながした。

「んでも、徳やん、さっきおつ母ンといっしよに、半田の方へいきよったぞ。」

と、兵太郎君はいつて、強い香をはなっているほし草のところに近づき、なかばころがるようにもたれかかった。

久助君は、徳一君のところにも仲間たちはいないことがわかって、がっかりした。が兵太郎君の動作をみると、きゆうに、ここで兵太郎君とふたりきりで遊ぼう、それでもじゆうぶんおもしろいという気がわいてきた。ほし草のつんであるところとか、藁積のなんであるところは、子どもにはひじょうにたくさんのお

しみをあたえてくれるものだ。そこで久助君も兵太郎君のそばへいって、自分のからだを、ゴムまりのようにほし草に向かつて投げつけた。ほし草はふわりと、やわらかに温かく久助君をうけとった。とたんに、ひちひちと音をたてて、ばったが頭の上から豆腐の方へ飛んでいった。

久助君は、頭や耳に草のすじがかかったが、とうとうしなかった。ほし草の山は昼間じゅう太陽に温められていたので、そこにもたれかかっていると、お母さんのふところにだかれていたじぶんを憶い出させるようなぬくとさだった。久助君は猫のようにくるいたい衝動が体の中にうずうずするのを感じた。

「兵タン、相撲とろうかやア。」
と、久助君はいった。

「やだ。昨日相撲しとって、袖ちぎって家でしかられないもん。」

と、兵太郎君が答える。そして膝を貧乏ゆるぎさせな

がら、おおむけに空をみている。

「んじゃ、蛙とびやろかア。」

と、久助君がいう。

「あげなもなおもしろかねえ。」

と、兵太郎君は一言のもとにはねつけて、鼻をきゅつと鳴らす。

久助君はしばらくだまっていたが、ものたりなくしょうがない。ころろと兵太郎君の方へころがり近づいていって、草の先を、おおむいている兵太郎君の耳の中へ入れようとした。

兵太郎君はほらふきでひょうきんで、人をよく笑わせるが、こういう種類のからかいはあまりこのまない。自尊心が傷つけられるからだ。

「やめよオツ。」

と、兵太郎君がどなった。

兵太郎君がおこって久助君に向かつてくれば、それは久助君ののぞむところだった。

「あんまり耳くそがたまつとるで、ちよつと掃除してやらア。」

といつて、久助君はまた草の先で、兵太郎君の頭にペしゃんとはりついた耳をくすぐる。

兵太郎君はおこっているつもりであつたが、くすぐったいのでとつぜんひあつというような声をあげて笑いだした。そして久助君の方にぶつかってきた。

そこでふたりは、おたがい猫の仔このようなものになつてしまったことを感じた。それからふたりは、ほし草にくるまりながら、上になり下になりしてくるいはじめた。

しばらくのあいだ久助君は、冗談じやうだんのつもりでくつていた。相手もそのつもりでやっていることだと思つていた。ところが、そのうちに、久助君は一つの疑問ぎもんにとらわれたした。どうも相手は本気になつてやうっているらしい。久助君を下からはねのけるときに久助君の胸むねをついたが、どうも冗談じやうだん半分の争いの場合

の力の入れかたとはちがつている。また、久助君を上からおさえつけるときの、相手のやせた腕うでがぶるぶるとふるえている。冗談半分ならそんなことはないはずである。

相手が真剣しんけんなら、此方こちらも真剣にならなきゃいけない、と久助君はそのつもりになつて、一生懸命いっしょうけんめいにやりだしたが、そうするうちにまもなくまたつぎの疑問ぎもんがわいてきた。やはり兵太郎君は冗談半分と心得こころえでくつているらしい。久助君の手が、あやまって相手の脇わきの下から熱っぽいふところにもぐりこんだとき、兵太郎君はクツクツと笑つたからである。

相手が冗談でやっているのなら、此方こちらだけ真剣でやうっているのは男らしくないことなので、此方こちらもそのつもりになろうと思つていると、まもなくまた前の疑問が頭をもたげる。

二つの疑問が交互こうごにあらわれたり消えたりしたが、ふたりはともかくくるいつづけた。

久助君は顔をほし草におしつけられて、ほし草をくわえたり、ほし草があるつもりでひっくり返ったところにほし草がなくて、頭をじかに地べたにぶつけ、じーんと頭中が鳴りわたって、熱い涙がうかんだりした。

また、しっかりと、複雑に、手足を相手の手足にかませているときは、自分と相手の足の区別などはつきりつかないので、相手の足をおさえつけたつもりで、自分のもう一方の足をおさえつけたりしていることもあった。

とつくみ合いは夕方までつづいた。帯はゆるみ、着物ほだらしくなってしまう、じっとり汗ばんだ。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君をおさえつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。ふたりはしいんとなってしまう。二町ばかりはなれた路を通るらしい車の輪の音がからからと聞こえてきた。それはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。そ

の音はもう夕方になったということを久助君にしらせた。

久助君はふいとさびしくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起ちあがって、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、とつくみ合いのあいだじゅう、久助君はいっぺんも相手の顔をみなかった。いまこうして相手をおさえていながらも、自分の顔は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔はみていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じっとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔につたってくる。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちよつと手をゆるめてみた。だが相手はもうその虚に乗じてはこない。久助君は手をはなしてしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこ

で久助君はついに立ちあがった。すると兵太郎君もむつくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらくながめていた。なんともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、みたこともない、さびしい顔つきの少年である。

なんということか。兵太郎君だと思いこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これはだれだろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やっぱり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。

そうわかって久助君はほっとした。

だが、それから久助君はこう思うようになった。――わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまふことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

きゅうすけくん
「久助君の話」

※『新装版 新美南吉童話集 2
おじいさんのランプ』（2012 年
12 月 1 日、大日本図書株式会
社）の「久助君の話」をもとに
一部、漢字表示とルビを編集し
ました。